

自主夜間中学におけるコミュニケーション講座の実践とその課題

A Practical Study of Cognitive Function Training in Voluntary Night Schools

上村 英男

Hideo KAMIMURA

福岡工業大学短期大学部情報メディア学科

Fukuoka Institute of Technology, Junior College

Email: h-kamimura@fit.ac.jp

あらまし：本稿では、自主夜間中学で行ったコミュニケーション講座の概要と課題について報告する。自主夜間中学には、コミュニケーションに不安を抱える参加者が散見される。そこで、コミュニケーション能力の涵養を目指し「コグトレ」を実践した。参加者からは「コミュニケーションの難しさを再認識した」という感想や「楽しかった」「もっと体験したい」などの感想があった。一方で、デリケートな参加者が多い自主夜間中学においては研究を進める際には慎重さが必要などの課題もあった。

キーワード：多様性、自主夜間中学、コミュニケーション能力、コグトレ

1. はじめに

学修者の多様性の拡大が顕著となり、教育現場においても様々な特性を持った学修者への対応が求められる。

2022年に発表された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について」⁽¹⁾では、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は、小・中学校で8.8%、高等学校で2.2%と報告されている。この調査は10年おきに実施されており、その割合は年々増加傾向にある。

また、2023年に行われた調査「児童生徒の問題行動・不登校など生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果⁽²⁾では、不登校児童生徒数が小・中学校で約34万6千人、高等学校で約6万8千人とされ、それぞれ前年度の約29万9千人、約6万人から増加していることが報告されている。

学校生活への適応が難しいなどの理由で学校を長期欠席している児童生徒が増加する中で、それら児童生徒の受け入れ先として、学びの多様化学校（いわゆる不登校特例校）や公立夜間中学の整備が進められている。また、民間においてもフリースクールや自主夜間中学が設立されている。

児童生徒が長期欠席となった理由は様々あると思われるが、コミュニケーションにかかわる理由も少なからずあると推察される。そのため、学びの多様化学校や公立夜間中学では授業時間や教育課程において柔軟な対応が取られるだけでなく、コミュニケーション能力などの向上を期待した取り組みがなされている。

自主夜間中学の参加者もその参加理由は様々であるが、コミュニケーションに不安を抱えていると思われる参加者も散見される。そこで、自主夜間中学においてコミュニケーション講座を実施したので、その概要と課題を報告する。

2. 夜間中学

夜間中学は2025年4月時点で公立61校、私立1校が設置されている⁽³⁾。設置されている都道府県は図1の通りでありすべての都道府県に設置されているわけではない。自主夜間中学については、全国各地でボランティア活動として行われている側面があり、どれだけ設置されているのか把握するのは難しい。全国夜間中学校研究会において2017年9月時点の一覧⁽⁴⁾は公表されているが、その後設立されたものもあり、現在あるすべての自主夜間中学を網羅しているわけではないと思われる。今回コミュニケーション講座を実践したのは公立の夜間中学が設置されていないA県にある自主夜間中学である。すでに同県において開設されていた自主夜間中学の姉妹校という位置づけで発足し、隔週の土曜日の夜に地域のコミュニティーセンターを会場に開設している。



図1 2025年4月時点での夜間中学の設置状況
(文部科学省の資料をもとに筆者が作成)

3. 実践

夜間中学の授業を始める前の15分間をコミュニ

ケーション講座の時間としていただいた。実践した内容は「コグトレ」における「姿位伝言」と「何が一番？」である。「コグトレ」とは認知トレーニングの略称で社会面・学習面・身体面の3方面から子どもを支援するための包括的プログラムである⁽⁵⁾。

コミュニケーションをとる際には、こちらの思いを正確に伝えることや相手が伝えたことを正確にとらえることが必要となる。自分では正確に伝えられていると思っても思いのほか伝えられていないことはよくあり、そのことが原因でコミュニケーションに困難が生じることもある。今回実践した「姿位伝言」はカードに描いてあるポーズを口頭で伝え、聞いた人がそのポーズを再現するというものである。

「姿位伝言」を通して、正確に伝えることや正確にとらえることの難しさを体験してもらった(図2)。参加者からは「コミュニケーションの難しさを改めて再認識した。同じ国の人間同士でも齟齬や行き違いが生じてしまうのに外国人との国家外交がより複雑なのは当たり前だと思った。どうしていけばより良くしていけるかもっと学んでみたいと思った。」などの意見があった。

また、日常の会話では、相手から聞いた内容を整理し自分なりに把握しながら同時に会話を続ける必要がある。「何が一番？」を通して、相手が言っている内容を順次整理し把握することの難しさを体験してもらった。特に高齢の参加者にとっては難しい様子が見受けられた。また、問題を一度聞いただけではなかなか把握できず、教員スタッフからも「もう一度言ってほしい」などの声があり、次々と進む会話の中で内容を把握することの難しさが実感できたようである。

これらの内容は、特別な知識を必要とせず実践できるため、幅広い年齢層の参加者が在籍する夜間中学においては実践に適していると思われる。体験者からは「楽しかった」「他の種類のものも体験したい」などの前向きな感想があり、楽しみながら継続することができる可能性が感じられた。



図2 実践の様子

4. 課題

今回実践をさせていただいた自主夜間中学では、すでに時間割が定着しており、時間割の中で新たにコミュニケーション講座を実践させていただくことは難しかった。そのため、夜間中学の授業を始める前の15分間に行った。短い時間の中ではあまり多くの内容を行うことはできず、コミュニケーションの難しさを実感してもらうことはできたが、コミュニケーション能力の涵養という意味ではさらに回数を重ねる必要がある。参加者からも時間が「短かった」との感想が多くみられた。

参加者自体も少なかった。これは、学齢の生徒の中には保護者に送ってもらう生徒もおり、土曜日の夕方に早く来ることが難しい参加者もいたと思われる。また、「コミュニケーション講座」と謳ったもの自体に参加することをためらう参加者もいたと思われる。

自主夜間中学の参加者・保護者のなかにはデリケートな方も多いため、研究にあたっては信頼関係を築くことから始めなければならなかった。今回の取り組みも、研究を依頼した後半年間、視察を繰り返し、時にはボランティア教員として参加して顔を覚えてもらった後に実現できた。また、実践時には参加者の変化の観察や詳細なアンケートの実施も検討したが、参加者・保護者のことを考慮し今回は控えることとした。どのような場合も研究を実施するにあたっては、対象者のことを最大限考慮して進めることは当然であるが、今回の対象者は特に配慮を必要とした。

謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費(23K02698)の助成を受けたものである。

参考文献

- (1) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：“通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について”，https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf (参照 2025.5.21)
- (2) 文部科学省初等中等教育局児童生徒課：“令和5年度児童生徒の問題行動・不登校など生徒指導上の諸課題に関する調査結果について”，p.68, 2024.
- (3) 文部科学省：“夜間中学の設置・検討状況”，https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/yakan/index_00003.htm (参照 2025.5.21)
- (4) 全国夜間中学校研究会：“全国自主夜間中学 関係諸グループ 一覧”，https://zenyachu.sakura.ne.jp/public_html/jishuyachu.html (参照 2025.5.21)
- (5) 日本 CO-TR 学会 HP：<https://cog-tr.net/> (参照 2025.5.21)